

Title	西洋美術史研究(澤木四方吉著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.142(696)- 143(697)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る所が最も大である。ランケを中心とした諸篇に於て、『歴史家ランケなるものは史籍の讀者ランケから生起し』(三九四頁)、『彼が「ヴェネチヤ史のロンプス」たらんとして史料探訪に赴いた』(四〇九頁)ことを説くあたりは、誰も知れる事實乍ら、つい博士の筆力に魅せられるのである。またランプレヒトの史學論争も今更乍らこの記事によりドイツ史學の盛時を追憶せしむるものがある。

尤も博士は『宗教史の研究と史學』の項に、古代東方キリスト教との關係について一例として、アッシリヤ學者デイリツチの一九〇二年に於ける御前講演を引用(三五九頁)せられてゐるが、それよりもジョージ・スミスの一八七二年聖書考古學會に發表せる楔形文字の洪水傳説讀破の偉功を擧ぐべきではなかつたらうか。

次に文化史なる言葉は、世間一般には政治史との區別に於て使用せられてゐるけれども、博士は本書に於て、『文化史と言ふ語は近時の流行なるが、吾人の見る所では決して國家又は政治を蔑視すべきでない、國家及政治は文化の中心點である。之を離れては如何なる大努力も決して好文化史を成就せず、Riethen Freytagは國家を抜きにした文化史を立てたが之は不具である。さればこそ、國家を唯一の標準とする G. Schöler 一派の考も亦偏見である尙ほ又文化の名の下に自然科學的法則又は形式的階段を設けてこれに一切の史實を投込んで仕舞ふさいふ傾向を有するバックルやラムプレヒトの如きも、是亦歴史を逆に考へて之を窮窟にするもので決して文化科學たる歴史を取扱ふに當を得たものでない』(三五二頁)

と斷定せられてゐる。舊來のドイツ正統學派の流を汲んだこの史

觀は、博士の本書全般に亘る最も公正なる立場であるやうに思はれる。

最後に本書に散見する『抗議派』(二九九頁)、『葡爾瓦爾』(二九九頁)、『貌利典島』(三〇二、三二二頁)などは、今日の我等には縁遠い言葉で、之は博士三十年の史的生涯の中に於て、本邦史學が淘汰し行いた所の足跡を示すものであるが、博士は歴史用語について細心の注意を拂はれてゐた様で、例へば外國語の Chimie を區別せんと努力せられ、後者に對しては特にチに〇を附したる特別の文字を作成せられたほどである。(中にも『世界史潮』四、九頁等)本邦によく誤用せらるる『ルネサンス』といふ言葉について博士は『世界史潮』(七、九頁等のルビ)及び本書(三五四、五三六頁等のルビ)及び四〇六、五一六頁等の本文に於てルネサンスと英語讀させられ、『希臘文明の潮流』(三〇五、三一三頁のルビ)に於ては、佛語でルネサンスと記され何れも正しく使用されてゐる。然るにその遺稿である『ルネッサンス概説』に於て、書名も内容も共に『ツ』の字を加へて、世間並に誤用せられてゐるのは博士本來の用語法であつたか聊か異様に思はれる點である。(間崎万里)

西洋美術史研究

(澤木四方吉著
岩波書店發行)

西洋美術史學者として光を放つてゐた澤木四方吉氏の遺稿、ルネサンスの部が表題の書の下巻としてこの程出版せられた。

之には嘗つて單行本として世に出た『美術の都』、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』とその他が含まれ、新に多くの寫眞版が增補せられ

てみる。『レオナルド・ダ・ヴィンチ』は、偶々渡歐の船中に愛讀し、伊王歡迎のために盛飾せられたミラノのサンタ・マリヤ・デレ・グラチエの僧院附屬の食堂に、ダヴィンチの『最後の晚餐圖』を特に興味を以て見ることを得しめた、私に取つても忘れる事の出来ない書物なので、之を含んだこの良著がかく美裝せられて新に多くの讀者を持ち得るに至つたことは私のひそかに喜に堪へない所である。

本書の初めの部分に於て用ゐられてゐた「ルネッサンス」なる用語が、この術語の意義を考證せる最後の一篇(五七七—五八〇頁)に於て「ルネッサンス」と改められてゐることは、この語が西洋史上特に重要な時期を表示する言葉であるだけに、極めて意義あることである。當期研究の權威者としての澤木氏によつてのこの用法は、我等すべてが踏襲すべき標準語を一定したことになるのであつて、今後我等はルネッサンス若くはルネーッサンスの用語の使用を避くべきである。(間崎万里)

上代文學 日本精神 (野村 八良著)
に現れた 大岡山書店刊行

本書の論述の趣旨はその巻頭の序言に明かにされてゐる。即ち「……今日の思想が何となく中心を失つて居り、徒に酔つてゐるもの、溺れてゐる者が多いのであるから、其の匡救の方法としては、中心を明にし、陶醉者、惑溺者に自覺を促し、以て一般民衆に歸趨する所を示さなければならぬ。それで一大先覺者の出現も待望せられるが、差當り識者間に良策が講究せられなければならぬ。洵に

微々たる予輩と雖も、官學に奉仕して日々古文學を講じてゐる職責上、徒に袖手傍觀は出来ないのである。憂心怏々私に平生考察してゐる所を披瀝し、以て熱烈なる祖國愛を同志の間に唱道しようと思ふ念は止み難い。其の一端が此の一篇となつたのである。』さうしてまづ序論としては上代文學一般、國語の特性と上代文學、古史神話の特質、及び上代史概観などを述べ、次に本論としてまづ上代人の生活及び風習を各方面から叙べ、ついで上代文學に現はれた日本の諸觀念を細目に分けて詳述し、最後に餘論として中古時代並に武家時代文學上の日本精神を略述した。かくて本書は「古今を貫いて日本精神の如何なるものであるかを明かにするので、畢竟今の人に國民的自覺を促すのを目的とするのである」。しかしながら吾々が本書を通讀して感ずることは、その論述の事項があまりに多岐に亘りすぎた故か、謂ふところの『日本精神』の感銘が甚だ稀薄となつたらうらみがある。もし『日本精神』をもつて、『敬神崇祖を最大の信條とし、どこまでも強い國家的意識を持ち、飽くまでも堅い皇室中心主義を抱いて、此の金甌無缺の國體を今日に傳へた』われらの祖先の精神を意味するとなすならば、論述の事項をも少し局限して、この點を強調すべきであつたらうと思ふ。なほ序に一言したい。思想問題の對策として、祖先の精神を顧みることの妥當であることはいふまでもないけれども、しかし現下の思想問題は現實の社會情勢と密接の關係があるのであるから、歴史研究の尊重とともに、他方において嚴正なる現實の批判と匡正を怠つてはならないことを留意してもらひたい。(松本芳夫)